

平成元年 1989年 創刊 No.432

# 月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年4月号



Ferdinand Georg Waldmüller, Berglandschaft mit der Ruine Liechtenstein bei Mödling, 1859 LIECHTENSTEIN, The Princely Collections, Vaduz - Vienna

## 杉本純の原子力の話 II

### ウィーンと京都 No.165

杉本 純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長）

東京科学大学グリーン・トランスフォーメーション・イニシアティブ（Science Tokyo GXI）の公開シンポジウム「ワット・ビット連携に貢献する原子力」が、3月5日大岡山キャンパスのデジタル多目的ホールにて開催された。GXを目指す産業界・自治体・研究機関等の企業家、行政官、技術者、研究者を中心として、オンラインを含めて約360名の参加があった。

加藤之貴氏（GXI 統括、東京科学大学ゼロカーボンエネルギー研究所所長・教授）による開会挨拶の後、石田裕之氏（三菱総合研究所マネージャー）より「ワット・ビット連携：AI時代のインフラ国富論 データセンター分散配置で描く脱炭素と地域活性化のビジョン」、高野雅晴氏（ビットメディア代表取締役社長/MESH-X 代表取締役）より「デジタル×エネルギー産業革命：「ワット・ビット連携」が拓く日本の道筋」、秋元圭吾氏（地球環境産業技術研究機構グループリーダー/東京科学大学特任教授）より「DXによる電力増大および変動性再エネ増大への対応：ワット・ビット連携と原子力の役割」、川村慎一氏（日立GEベルノバニュークリアエナジー技師長）より「原子力利用を巡る世界の動向と新型炉開発の挑戦—SMR: BWREX-300の国際展開」、竹下健二氏（東京科学大学特任教授）より「日本の原子力の中長期展望」とそれぞれ題する講演があった。

相楽洋氏（東京科学大学教授）をモデレータ、各講演者をパネラーとしたパネル討論が実施され、GXに与える原子力の役割等について討論が行われた。柏木孝夫氏（東京科学大学名誉教授）による講評の後、柏木孝夫 GX 賞の授与式が行われ、最後に小林能直氏（東京科学大学ゼロカーボンエネルギー研究所副所長・教授）より閉会の挨拶があった。

近年の AI の進展に伴うデータセンター、半導体産業の進展により電力消費量が今後増加すると予測され、そこで情報産業を含む産業の GX を駆動するカーボンニュートラルな一次エネルギー源としての原子力に着目した講演とパネル討論により、各分野の最前線の情報に接することができ、意義深いシンポジウムとなった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の四月のイベントを紹介したい。ウィーンでは、春の訪れとともにウィーン・シティ・マラソンが開催される。市内の主要な歴史的街路を走るこの大会は、1984年に始まり、市民と世界各国の参加者がともに街を駆け抜ける大規模なスポーツ行事へと発展した。冬の静けさを経た都市が再び躍動を取り戻し、音楽や応援の中で人々が一体となる光景は、現代都市ウィーンの開かれた活力を象徴している。

一方、京都では4月、祇園甲部で上演される「都をどり」が春の風物詩となる。明治5年に始まったこの舞踊公演は、芸舞妓が四季の情景を優雅に舞いで表現するもので、近代京都の文化発信の象徴として受け継がれてきた。華やかな衣装と洗練された所作には王朝文化の美意識が息づき、観客は舞台の中に季節の移ろいと時間の重なりを感じ取る。桜の季節と響き合う点にも京都らしさがあり、最後の芸舞妓から観客への手拭い投げとともに観客を魅了している。

ウィーンのマラソンが身体の動きによって春の活力を表すのに対し、京都の舞は静かな所作によって季節の美を映し出す。形は異なるが、いずれも春の到来を人々が共有する場であり、両市の文化の個性を鮮やかに示している。

余談であるが、筆者は学内で開催された上記シンポジウムに参加して最新の情報に接するとともに、懐かしい方々とも言葉を交わすことができた。ウィーンのシティ・マラソンでは音楽が流れる中で参加者が楽しそうに走っているのを見物した。京都の都をどりでは、フィナーレで手拭いをゲットできたことが忘れられない。今月も両市の4月のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン・シティ・マラソンの写真を掲載させていただく。



<https://www.vienna-marathon.com/?go=marathon>